
私のご主人様

篠原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私のご主人様

【Nコード】

N4851L

【作者名】

篠原

【あらすじ】

ある雨風吹き荒れる日、私は、一人の少女と出会った。

尻尾は口ほどにものを言う（前書き）

- ・犬目線（最初は子犬から
- ・なのにも関わらず超冷め切ってる（色んな意味で
- ・もはや思考回路が犬じゃない。誰だお前状態
- ・書いてる本人も驚きの不明さ。おれは何処に行って何処に行きつきたいのか。

以上、なんか大丈夫そうだ。 って方は強者はどうぞ

尻尾は口ほどにものを言う

「コロ！こつちこつち！！」

そういつて、笑いながら手を振るご主人様。

今年で小学校2年生になって、妹もいるせいかだいぶお姉さんらしさが出てきた。

…それでも多少のお転婆は健在であるが。

「聡美、あんまり遠くに行かないのよ」

「はぁーい！さ、コロ行くよ！！」

「ワンツ！」

聡美とはご主人様の名前だ。

物事に聴く、美しい。いつぞやご主人様がそういつて私に説明してくれた。

本人的にはしつかり意味を理解していないようだが、あのときのうれしそうな顔は、今でも忘れることができない。

「コロ！それ、とつてこーい！！」

言うのが早いか投げるが早いか、体の全体を使って投げるフリスビーは勢いをつけて遠くまで飛んでいく。

最近はその追いかけて、できる限り空中でキャッチしてからご主人様の元まで持っていくのが私の仕事である。

ちなみに空中でキャッチするのは、地面に落ちたときよりもご主人様にたくさん褒めてもらうというごく単純な理由からだ。

私は、ある雨の降る日に今のご主人様に拾われた。
その日はいつもより強い雨に、それでもかというほどの風が吹く日だった。

前の主人の都合で、生まれた子犬のうち何匹かは里子に出されることとなって、私もそのうちの一匹だった。

しかし、ほとんどの兄弟が引き取られていく中で唯一残った私は、1ヶ月、2ヶ月、と経つ中でついに痺れを切らした主人によって人目につきにくい夜中にその場所へとつれてこられた。

「もっと、飼い主に尻尾を振らないお前が悪いんだからな」

そう言い残して立ち去る主人を、そのときまだ子犬だった私は追いかける術を持っておらず、主人の背中がだんだんと遠くなるのをただぼんやりと段ボール箱の中で眺めてい

た。

それからどんどん日が経つ中で、ようやく今の現状を理解した私は、どうすることもできず、またどうすることもなくやせ細る体をどこか他人事のように思いながら毎日を

その段ボール箱の中で過ごした。

たまに私を見て立ち止まる人間から、時には餌を貰ってどうにか生きていたが、その人間に拾ってもらうことはなかった。

そして、そんな人間もしばらく経つたらぱたりと来なくなり、また私は一匹になる。

それもまた、しょうがない。

いつまでも来なくなつた人間に固執しても、私にはどうすることもできないのだ。

ならばさつさと割り切つて、そういう人間もいた。ということ思ひ出にしまつてしまえばいい。

そんな生活を送っていたとき、ついに私の生命を脅かす問題に直面した。

後で聞いた話によるとどうやら台風なるものがきていたらしく、普段以上の風と雨に、終にこれで私の人生は終わるのかと思つた。生き物の人生は、こつちも簡単に。

でも、それもまた、しょうがない。

いつか終わりは来るもの。それが早いか遅いかの違いだけ。

そう思つて重たい瞼を閉じかけたとき、ご主人様が現れたのだ。

「ワンちゃん、だいじょうぶ？」

黄色い傘に、同じく黄色い長靴の少女。

最初は、いつもの人間か。それだけだった。しかし、いつまで経つてもその場から動かない少女に、自分の身など棚に上げて、ほんの少しだけ心配になつた。

このように吹き荒れる雨風の中、こんなところに立ち止まつて、私のような存在を気にかけて。

早く、帰ればいいのに。

ところが少女は私の重いとは裏腹に、そこから一步も動かずひたす

ら私を気にかけていた。

だいじょうぶ？ いたいなの？ きもちわるいの？

私のことはいいから、早くお家にお帰り。

しかし少女は動かない。それどころか、

「ワンちゃん、お家くる？ おかあさんもおとうさんも、とってもやさしいよ」

そう言つて震える私を拾い上げ、寒くないように、雨風に当たらないようにしっかりとその腕に抱いて、暖かい今の家へと連れ帰ってくれた。

そこから病院に連れて行かれ、次第に回復していく体調を自分のことのように喜んでくれる少女に、私は始めて自分の、自分だけの守るべきご主人様を見つけた気分だった。

今まで、前の主人の家にいたときも、来る人間は特に興味もなくまた主人に興味があるわけでもなかったため、いつも我関せずの態度をとり続けた。

興味もない、愛着もない、そんな私は無関係の人間にわざわざ尻尾を振つて、かまつてと自ら寄つていく兄弟をいつも横目で見ていた。

その愛想のない態度によつて捨てられたことを、野良犬生活を始めてしばらく経つてようやく気づいたが改める気はなく、いつもそんな調子だった。

餌をやつたらなつくかもしれない。そんな人間にも態度を変えることなく、結局見捨てられた。

そんな中で、あの雨の中愛想のかけらもない私を拾い、ここまで育ててくれたご主人様に、私は、残りの人生をご主人様のために使うことをそのとき決意した。

それから数年、私も立派な犬となり、今ではご主人様のよき理解者であると思っている。

「ワンワン！ー！」

「コロ偉い！もうほとんど落とさずにキャッチできるようになったね。さすがコロ！ー！」

そう言って首の周りやら背中やらを撫でて貰う。それを気持ちよさそうにして甘える私。

昔はできなかったことが、今はこんなにも簡単にすることができ

「ふふっ、コロったら嬉しそう。こんなに尻尾振っちゃって」

「ワンッ！ー！」

「もう一回したいの？しょうがないね、じゃあもう一回！ー！」

「ワンワンッ！ー！」

言い終わるや否や再びビュンッ！と風を切りながら飛ぶフリスビーを、昔の私は想像もできないような姿で追い掛け回す。

そう、すべては貴女の喜ぶ顔が見たいだけ。

尻尾は口ほどにものを言う(後書き)

こんなのが後4話ぐらい続きます。

それと、お題はここからお借りしました。

<http://207.noor.jp/>

あなたと歩く散歩道（前書き）

- ・ 相変わらずの意味不明さ
- ・ 犬って何

以上が大丈夫そうならどうぞ！

あなたと歩く散歩道

先日からご主人様は家にいない。

「聡美はね、おばあちゃんの家に行ってるの。だから帰ってくるのは明後日になるわね」

そう言っていたご主人様の母親は、久しぶりに元気のない私に少々苦笑いをしながら告げた。

散歩も餌やりも、すべてご主人様によって世話をしてもらい、寝る場所もご主人様が私に自ら進んで提供してくれた。

かわいい人形が並び、部屋を彩る小物もあちこちにおいてある。シンプルだがとてもかわいらしいご主人様の部屋は、いつもならば何てことない空間なのに、ご主人様が居ない今とても広く寂しい空間へと変わり果てた。

私はどうしてもそこに居づらくて、寝るとき意外はほかの部屋で過ごした。

ご主人様の母親がくれるご飯も、散歩も、すべてが味の無い、色のないモノクロの世界のように感じ、一人の夜はとても長く感じられた。

そして次の日、昼ごろ部屋で母親の近くに座っていた私の耳に、聞き覚えのある足音が聞こえた。

すぐさま立ち上がり玄関へと向かうと、そこには

「ただいまー！！あれ、コロ。久しぶりだね！」

「あら、お帰り聡美。おばあちゃんの家はどうだった？」

久しぶりに姿を見ることができた、私のご主人様。

その姿を見た瞬間、衝動を抑えきれず飛びついてしまった私を、ご主人様はその暖かい腕で抱きしめてくれた。

「とっても楽しかった！ん？どうしたのコロ、なんかいつもより元気がないね？具合わるいの？」

「ふふっコロはね、聡美が居なくて寂しかったのよ。散歩も餌もいつもの半分しかしてないものね」

「そうなのコロ？寂しい思いをさせちゃってごめんね」

いいえ、いいえ。ご主人様が謝る必要はありません。すべては弱い私のせい。

それでも優しく撫でてくれるその気持ちに、その手に甘えてしまつて、なんと情けない。

「じゃあ久しぶりに散歩にいこっかコロ！帰ったらしっかりご飯を食べようね」

「ワンッ！」

そう言つてリードを取り出し、首輪につないで、荷物を降ろして母親に元気よく「いつてきます！」と言つて、私はご主人様と一緒にいつもの散歩コースをたどる。

そこは先日のような色のないものではなく、自然たちの織り成す色鮮やかな世界を取り戻していた。

貴女が私の世界を彩る唯一の人なのです。

あなたと歩く散歩道（後書き）

お題はここからお借りしました。

<http://207.noor.jp/>

守る為ならなんだってするさ（前書き）

- ・いつも通りの意味不明さ
- ・むしろそれが通常運転

大丈夫な方は、どぞ

守る為ならなんだってするさ

その日も、一人と一匹で仲良く散歩コースをたどっていた。

しかし、たまたま見つけたまるで隠し道のような場所に、最近好奇心旺盛なご主人様はその道へと入ってしまう。

心配だから、と決められた道以外はあまりいかないようにと母親に言われているご主人様の、ちよつとした寄り道。

ご主人様のことを考えれば、なんとしてでもいつもの散歩コースをたどり無事家まで連れて帰ることが私の仕事。なのだが、

「コロ、お願い。ちよつとだけだから。ね？」

ご主人様の滅多にないお願いに弱い私は、無事連れて帰ることさえできれば少しぐらい…と始めての寄り道をすんなりと認めてしまった。

そんな私の甘い考えが、ご主人様をあんな目にあわせるなんてこと、その時考えても居なかった。

ご主人様の初めての寄り道は、新しい発見の多いとても充実したものとなっていた。

見るものすべてが新鮮で、あっちこっちを忙しそうに見るご主人様が転ばないように、そしていざ帰れるように私はなるべく周りを見て風景を頭に叩き込む。

そんな時、ご主人様が「あっ！」と声を上げ、走り出す。

リードによってつながれている私は、半歩遅れながらもあわててご主人様の後を追った。

ようやく歩みを止めたとき私の目に映ったのは、いつも暮らす町並みを見下ろす、いわゆる絶景と呼ばれる場所に立っていた。

純粹にその光景に感動している私の隣で、ご主人様もきつと同じことを思っていたに違いない。

なぜなら、隣を見ると大きな瞳をさらに見開いて、輝かせながらその光景を見ていたから。

私たち一人と一匹は、しばらくその光景にその場から動くことができなかつた。

それからどれぐらい時間が経っただろうか。

ようやくあたりも見回すことができる余裕を取り戻したご主人様と私。

きれいだったね、今度誰か連れてこよう、等と感想を精一杯私に伝えるご主人様は非常に満足そうで、私はたまの寄り道もいいかもしれない。と、そう思った。そのとき

「あー？誰か他のやつがいるぜ？」

「ンだど？…マジかよ、俺らの秘密の場所だと思ってたのに」

「おいおい、ばれちまったじゃねーか。最高のスポットだってのに」

現れたのは高校生と思しき三人の男子。

それぞれ耳にピアスや茶髪の髪を見て、普通の高校生ではないことをその空気からも感じ取った私は、いまだ状況がつかめずきょんとするご主人様の前に立ちはだかる。

「嬢ちゃん、どうやってきたのかしんねーけどさ、ここ俺らの秘密基地なんだよねー」

「そうそう、だからさ、誰にも言わないでくんね？つか、もう二度とくんなっつーか」

「ぎやははっ！田辺、お前こーんなちっさいガキにそれはひどくねーか？」

「バーカ、そうでもしなきゃ伝わんねーだろが。ガキはガキなんだから」

「はっ！！そりや違うない！！」

そう言つて明らかにご主人様を馬鹿にする三人のその態度に私は今にも襲い掛かりそんな思いを必死にこらえて、まずご主人様をこの場から無事に逃がすことだけを考えてた。

しかし、その三人に脅えきつたかのようになきそうなご主人様は、一歩たりとも動けそうにない。

どうする、どうする？

考えを張り巡らせるが、なかなかいい考えは思いつかない。焦りばかり増す私の耳に、一人の声が届いた。

「つかよ、もういつそこで喋れねえぐらいに痛めつけときゃ、誰にもいわねえんじゃねーの？」

痛めつける？誰を？

その男子の言つてることの意味が一瞬わからなかった私は、残りの二人の発した「さんせーい」「決まりだな」という実行を意味する

ような声に瞬時に我に帰った。

そこからは、無我夢中で何かを考えるなんてできなかったに等しい。

ただ、

私なんか簡単に通り越して、ご主人様の肩をつかむその無粋な手に思い切り噛み付いて、それに悲鳴をあげて一歩あらずさる男子を無視し、開けた退路へいまだしっかりと握られているリードを通じてご主人様を誘導する。

それにハッと気づいたご主人様も、あわてて走り出した。

しかし、リーチは当然あちらの方が上。

すぐにガツとつかまれるご主人様の髪。それに気づいた私はすぐに威嚇して噛み付こうとするけど、あちらもそんな私の行動パターンなんて読んでいて、隣にいた男によって殴り飛ばされた。

近くにあった木にぶつかって、一瞬意識が飛びそうになるのを、悲鳴をあげるような声で私の名を呼ぶご主人様の声によってどうにかつなぎとめた。

助けなければ。私の大事なご主人様。

そう思ったのと同時に、さきほどよりも危機的状況に野生としての本能が目覚めたのかスピードも、威力も、倍にしてまずご主人様の近くに居ないほうの男の喉笛に噛み付いた。

そして、その男が倒れたことを確認すると、威嚇をしたまま今度はご主人様と一緒に居るせいで動きの落ちた男子の背後へといとも簡単に回ることに成功し、肩へと噛み付きご主人様を解放する。

男子の衝撃でよろめいてこけてしまったご主人様の服を引っ張って

なんとか急いで立たせると、そのまま怒り狂う男子を無視して一気に来た道を駆け戻る。

だが、いつもの道に出る後一步というところで追いつかれてしまい私はスピードを一気に落として、急に止まった私に釣られて立ち止まるご主人様とその男子の間に立ちふさがるようにして、グルルルと威嚇する。

そんな私の姿に、戻っておいでとなきながら叫ぶご主人様の声を聞きながら、今その状態を作っているのは自分のせいなのに、慰めることもできない無力な自分に腹が立ち、せめて逃げる時間を作ることに最善を尽くすと改めて決意した。

ご主人様も、その私の姿に、しばらく困惑する姿を見せるが、すぐに「誰か呼んで来るから！！」と駆けて行った。

そう、それでいい。

もうここに帰ってこなくてもいいから。早く安全で暖かい、お家にお帰り。

そういい残したご主人様をあわてて追いかけようとする男子の前に再び立ちはだかって精一杯の声で吼える。

ここから先は通さない。

そんな思いを込めて吼える。最低でも、ご主人様の安全が確かになるまで。

お前をこの先になんて、ご主人様の元へなんて絶対に行かせない。

貴女を守るために研いできた牙を、
今ここでご覧に入れましょう。

裏切られても信じたい（前書き）

- ・本気で終着点？何それおいしいの？状態
- ・犬ってなんだっけ。とウィキで無性に調べなければという思いに
駆られた（おれが
- ・相も変わらず通常運転万歳

それでも大丈夫！って方はどうぞ！

裏切られても信じたい

そんな事件があったのはほんの数日前。

あの日、結局最後の力一滴まで振り絞ってその男子の足止めをしていた私は、すでに満身創痍。

どこからこんな力が出るのかと自分でも驚いた。

しかしそんな状態でも限界というものは無常にも訪れるというもので。

「へ、へへっ！！梃子搦らせやがってこのクソ犬！！」

そう言っただけ私の頭を蹴る男子。

立って、動いて、その足に噛み付いてやりたいのに。

ご主人様を、守らなきゃいけないのに。

まるで別人のもののようにピクリとも動かない自分の手足に、苛立ちを感じる。

動け！動け！！

けれどその祈りもむなしく、終には意識まで朦朧としてきて、ご主人様は無事家に帰れたかな…と心配になる。

途中で迷っていないか、どこかで転んではいないだろうか。

心配は尽きない。

心配で、心配で。確かめたいがすでに体は動かない。

もっと、力があつたらいいのに。もっと、体が丈夫だつたらよかったのに。

ないものねだりだと言つことはわかつてはいるのに、尽きない願いにどこか自嘲気味に笑いながらそこで意識を手放した。

それから、次目を覚ますと、目に入つたのはあたり一面白い世界。

一瞬どこか把握できずに、あたりを見回そうと重い体を持ち上げようとすると、後ろから伸びた手に頭にポスンと手を置かれた。

その行動に驚いて、条件反射で噛み付こうとするが、その手はひらりとすぐに逃げてしまつて口は宙を噛んだ。

なんなんだ、いつたい。

そう思つてゆっくりと後ろを見れば、そこに居たのは

「なんだコロ、お前元氣そうで安心したよ」

弱つてた小さいころから顔なじみの獣医の姿がそこにあつた。

「いやあ、一時は死ぬかと思つたからさ。ほんと、心配した」

そう言つて笑う目の下に隈があることに気づいた私は、どこか申し訳ないと思う。

「なんだ。元氣ないな。安心しろ。お前が体を張つて守つた聡美ちゃんは元氣だからさ」

突然聞かされた、意識を失う前氣になつて氣になつてしょうがない

ことをポンと軽く言われて、ばやけていた思考が一気にクリアになる。

そうだ、ご主人様！私はちゃんと役目を果たせたのか！？ちゃんとご主人様を守ることができたのだろうか！？

あの後、いったい何が？

クリアになったとたんに混乱する思考、しかしその答えは、まるで見透かしたかのように獣医から与えられた。

あの後、私が気絶してすぐに警察が駆けつけたこと。

男子たちはすぐさま捕まり、こっぴどく怒られたのだということ。ご主人様は無事で、多少擦り傷はあるが問題ないとのこと。

要点をまとめたような内容を聞いて、ひとまず安心した。と、ほっと息をつくが

「でもね、めんどくさい事が起きちゃったんだよね」

その獣医の最後の一言に、首をかしげた。

獣医は、聡美ちゃんを守ったのは偉かったぞ。と頭を乱暴に撫でながら告げるが、それとは別に、今度は真剣そうな目で私を見て、続けてこういった。その内容は、

私が噛んだ学生たちはほとんど「正当防衛」ということで片がついた。けど、一人だけそれでは済まされない人物がいたのだ。

それが、守るために喉笛に噛み付いた男子のことで、その男子はいったん病院に運ばれたが出血多量で死亡。相手方の両親は大激怒しているそうだ。

しかし、警察としても確かにやりすぎだと思うが、そういう訓練を

されていない私を使って喉笛に噛み付かせることはあのときパニッ
ク状態で正常な思考ができなかったご主人様には不可能で、全ての
責任は噛みついた私に回ってきたわけだ。

それを聞いて安心した。

私のせいで、ご主人様に迷惑をかけることがなくて。本当に安堵し
た。でも、

その全ての責任が回ってきた私は、あちら側の最大の譲歩として

「危険分子」であるその犬を処分すること」

というどこかお偉いさんからの命令に従わなければならなくなった。

「ただ主人を守っただけつつうのに…お前には可哀そうな話なんだ
がな…」

そう言っただけで頭を今度は優しく撫でてくれる獣医。

私はそれを抵抗することなく受け入れる。

確かに、これからご主人様に会えないのはさびしい。もう守る事も、
一緒に散歩する事も叶わないなんて。

でも、一つだけ嬉しい事がある。

それは、もうすでにあの場で息絶えたものだと思っただ事、こうし
てまだ命をつなぎとめることが出来たのだという事。

あの時の私だったら、ご主人様の事が心配で未練が残る。けど、今
こうして事の顛末を聞いた今となっては、もう私なんてどうでもい
いのだ。

最終的に守れて、本当に良かった。

そう思つて、今まで入っていた肩の力がずっと抜けるのを感じた。それと同時に、診察室の入り口のドアが控えめにノックされた。

「はい、開いてますよー」

「あの…コロの事なんですけど…」

そう言いながらドアを開いたのはご主人様の母親だった。

どこか気まずそうにしながら入ってくる母親は、ほんの少しだが、やつれたようにも見える。

「あ、はいはい。コロちゃん目を覚ましましたよーお会いになりますか？」

「いえ、その事なんですが…」

「？どうかされましたか」

「あの…娘が…コロに、会いたくないって…言つてまして…」

「え？」

「すみません…明日、保健所の方が来られるまで、預かってもらつてもよろしいですか？」

「え、あ、ああ、それは…ウチとしては全然構いませんけど…」

「ありがとうございます。それでは…」

ペコツと最後に頭を下げた出て行つた母親は、小走りでその場から立ち去つた。

後に残された私と獣医の間に奇妙な空気が流れる。

「あー…いや、さ。別に、聡美ちゃん、お前の事が嫌いになつたつてわけじゃ…ないと思うんだけど」

早くもその空気を壊したのは獣医で、ぎこちないが私をなんとか励まそうとしてくれるのだけはわかった。

その後も、あーとかうーとか唸りながらなんとか私を元気づけようとする獣医がとても優しく、とても悲しくなった。

明日保健所が来る。

そこで、私の命は終わるのだ。

せめて、最後にご主人様の元気な笑顔が見たいと思った私は、贅沢なんでしょうか。

少し悲しいけれど、それも貴女のご意思なら。私はただ忠実に従うだけ。

裏切られても信じたい（後書き）

お題はこちらからお借りしています。

というかこのシリーズ全部ここから借りてます。

<http://207.noor.jp/>

・ごはんが好きおやつが好きサンボが好きあなたが好き（前書き）

- ・変だって？いやいや、これ通常運転だから。
- ・まさかの完結。初めて完結させた物語がこれって一体…
- ・なんか話が繋がらない。ような気もするけど結論的に言えばやっぱ繋がってない。いろんなところが。
- ・でっていう。

それでも大丈夫ってかたは！どぞ！！

ごはんが好きおやつが好きサンボが好きあなたが好き

貴女と一緒にとるご飯が好きでした。

たとえ内容は別でも、同じ気持ちを共有できたから。

貴女と一緒に食べるおやつが好きでした。

おやつを食べながら話してくれる話は幸せなひと時でしたから。

貴女と一緒に歩く道が好きでした。

散歩の途中で出会った人に私が褒められて照れる貴女の笑顔は何にも変えがたいものだったから。

そして、あの雨風吹く日、私を拾ってくれた貴女が大好きです。

私に”生きる意味”というものを与えてくれたから。

だけど、それなのに、

「コロ、嫌だ。やっぱり別れるのは嫌!!」

貴女を最後まで守れなくて、

「私を守ってくれたコロを無かった事になんてできない!! やっぱ
り帰ってきてよぉ!! コロ!!」

最後の最後まで、

「う…コロ!ごめんね…ッ!…ほんとにごめんねッ!…!!」

貴女を悲しませてしまった愚かな私を許してください。

もし次の人生があるならば、次こそは貴女のために。

こはんが好きおやつが好きサンボが好きあなたが好き（後書き）

ここまでお付き合いいただき、ありがとうございました！！
これからもよろしければお付き合いお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4851/>

私のご主人様

2010年10月28日05時44分発行